

令和5年度
川崎市小学校教育研究会養護研究会 研修会

子どもたちのいのちを守るために
～ASUKA モデルと小学校からの救命教育の推進～

7月19日（水）@川崎市教育会館
一般財団法人日本AED財団 理事 桐淵 博 先生

3年ぶりに参集型で研修会を行い、122名が参加しました。いのちを守るためには、心肺蘇生法の技術だけでなく「マインド」が大切なこと、そのための研修の在り方や子どもたちへの救命教育の取り組み等について学ぶことができました。

- ・12年前、6年生の桐田明日香さんが駅伝大会の練習中に倒れ、翌日死亡した。救急隊の到着まで心肺蘇生や AED の装着がなされなかった。この事故の教訓をいかし、二度と同じことが起きないように ASUKA モデルが作られた。
- ・痙攣や死戦期呼吸は心停止のサインであり、普段通りの呼吸がない時は「心停止の可能性」を疑い、すぐに行動を始めることが重要である。
- ・心肺蘇生法の研修はそれまでも行われていたが、想定訓練ができていなかった。また、救急車を呼ぶ際は、司令員から状況の確認や指示がある場合もあるので、現場で状況がわかる人が通報する。心肺停止が疑われる場合は、管理職への報告・判断よりも、一刻も早く救急車が到着するように「119番通報を優先する」体制づくりを。
- ・さいたま市では、小中学校で救命教育を行っている。学校をもっと安全は場所に…救命は一人ではなく、大人も子どもも「みんなでやろう！」

◎受講者の声◎

ASUKA モデル作成の経緯とそこに込めた想いを知ることで、学校に求められているものを改めて学ぶことができた。

あすかさんの思いを繋いでいくことが未来の子どもたちの健康につながることをいつも心にとどめておきたい。

改めて元気な子にも突然死が起こり得ること、日頃から緊急時に対応できる職員の体制づくりをする大切さが確認できた。

毎年校内研修会を行っていたが、マインドの部分が足りなかったと思った。「スキルとマインドを両方育む」を今後は意識して研修を行っていきたい。

「すぐに だれもが みんながやる」現場において合言葉にし、緊急時対応していきたい。

自校の緊急時対応マニュアルを見直すきっかけになった。

